



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3532 号 2017.2.27 発行

社説：岩手・矢巾いじめ防止条例／将来の世代へ教訓伝えて 河北新報 2017年2月26日
 「全ての町民がいかなるいじめも許さない心を持ち、子どもたちが安心して学び、健やかに成長できる環境を実現する」。前文には、悲劇を繰り返すまいという決意が盛り込まれた。

岩手県矢巾町で2015年7月、中学2年の村松亮さん＝当時（13）＝がいじめを苦にして自殺した問題を踏まえ町教委は、「町いじめ防止等に関する条例」の最終案を公表した。

基本理念には「いじめを行ってはならず、いじめを認識しながら放置してはならない」「いじめは絶対に許されない行為であり根絶を目指す」など率直な文言を記した。

村松さんの自殺を巡っては昨年12月、有識者による第三者委員会が町教委に報告書を提出。村松さんへの継続したいじめが「死にたい」と考える一因となったと認定し、「学校の対応が極めて不十分だった」と結論付けた。

担任教諭とやりとりした生活記録ノートで何度も被害を訴えていたが、学校側はいじめと認識できなかった。担任の踏み込んだ対応と学校全体のサポートがあれば、救えた命だった。

痛ましい教訓を町民代表の議会が制定する条例で受け継ぎ、いじめ根絶を宣言する意義は重い。実効性ある条例を目指すべきだ。

29条から成る最終案は関係者の責務も示した。町はいじめ防止対策を総合的に推進し、各学校は教職員の資質向上と連携強化に努める。保護者は子どもにいじめは許されない行為であることを理解させ、児童生徒は互いを尊重し違いや特性を認め合う精神を身に付けることを記した。

町教委の附属機関として第三者による「町いじめ問題対策委員会」の常設も盛り込んだ。大学教授や弁護士、医師ら6人以内で構成。防止策の実効性を高める研究を進め、いじめによる重大事態が発生した場合には調査に入る。

町教委は素案の段階で子どもや保護者向けに概要版を作成し「心で感じてください。いじめを受けている人は何も悪くありません」「学校はいじめがないか、しっかり調べます」などと呼び掛けた。町内6小中学校では児童生徒に説明した。こうした取り組みは継続し、世代を超えて教訓をつないでほしい。

岩手県教委によると、県内の国公立の小中高、特別支援学校が15年度に把握したいじめは過去最高の3274件に達し、前年度を1500件も上回った。矢巾町の問題を受けて県が条例で設置した県いじめ問題対策連絡協議会は「全ての学校にいじめがあるという考えで対策に取り組む」との姿勢を示す。

矢巾町の条例案は町議会定例会3月会議に提出され、可決を経て4月の施行を目指す。「全町民でいじめ根絶」という「矢巾モデル」を通じ、悲劇を繰り返さない方策を軌道に載せてもらいたい。

“思いやりの種”芽吹く 大阪発「ユニバーサルマナー」大阪日日新聞 2017年2月25日

全ての人にとって心地よい接し方「ユニバーサルマナー」を学ぶ動きが官民間問わず幅広い業界で広がりつつある。民間の検定試験の受験者は毎年増加。2020年には東京五輪・パラリンピックの開催を控えており、大阪生まれの新たな“思いやりの種”が芽吹こうとしている。

講習で得た知識を接客に生かす従業員。多くの企業でマナーを学ぶ動きが進んでいる＝大阪市阿倍野区のストレッチパンツ専門店「ピースリーあべのハルカス店」



◇協会立ち上げ

ユニバーサルマナーは、「自分とは違う誰かを思いやり、適切に理解して行動に移すこと」を意味する造語。ユニバーサルデザインのコネクト会社「ミライロ」（大阪市淀川区、垣内俊哉代表）が、13年にユニバーサルマナー協会を立ち上げ、同時に啓発に取り組んでいる。

同協会は障害者や高齢者、妊婦、外国人を含む全ての人々が過ごしやすい社会の在り方を模索。一環として検定試験制度を設けた。

検定試験制度は3級（講習のみ）と2級（講習と筆記試験）がある。いずれの講習も講師は障害者が務め、受講者は誘導の仕方や声掛けなどを学ぶ。

16年3月末時点で、3級は1万5千人、2級は5千人が取得。同協会によると、本年度中には3級が約2万5千人、2級は約7千人に達するとみている。個人受講者以外にも建築、旅行、行政など400社以上が従業員研修に用いている。

◇接客に変化

そんな中、アパレル業界にも動きが。衣料品製造販売の「バリュープランニング」（神戸市中央区）は、北海道から沖縄県まであるストレッチパンツを扱うグループ全店（257店）で参加。業界初の導入で、今月末までに従業員ら計300人が資格の取得を目指している。

同店は以前から高齢者や車いすでの来店客が多く、資格を取得した従業員には早速、接客する際の意識に変化が出ている。3級を取得した西日本エリアサブマネジャーの平田敬子さん（41）もその一人。お年寄りや聴覚障害者へのメモは横書きにする▽段差のチェックや車いすが通れる幅80センチを確保する▽障害者用トイレの位置を把握する一などのことに気を付けるようになったと言い「接客意識や店内を見直すきっかけになった」と話す。

ブロック長の花村明美さん（60）は、ユニバーサルマナーを学ぶ前は、各店舗で障害者らへの接客を身構えてしまったり、過度なサービスを行ってしまう従業員を見かけることがあったが、「気構えることなく、今まで以上に寄り添った接客ができるのでは」と今後の接客に期待をする。

◇世界へ向け

ユニバーサルマナーは世界からも注目を集め始めた。同協会にはミャンマーやエクアドル、フランスなどから講演依頼が殺到。マナーの理念が共感を呼んでいる。広報部長の岸田奈美さん（25）は、「日本はハード的な分野では先進国だが、ハートの部分はまだまだ足りない。『お手伝いできることはありますか』と、自ら行動できる格好いいユニバーサルマナーの先進国にしたい」と展望する。

<悲鳴上げるところ>（上） 引きこもりからの脱却 中日新聞 2017年2月11日

過度なストレスや失敗の経験をきっかけに、自宅に引きこもったり、精神障害を発症したりするケースは後を絶たない。誰もがその立場に陥る可能性があるにもかかわらず、当事者は周囲から、「弱い」「怠けている」との誤解を受けがちだ。「自分たちの心情を知って」

と願う当事者や家族の思い、支援団体が訴える当事者たちへの対応法を三回に分けて紹介する。

「君、何しに来たん」。Uターン就職のため、進学先の関東から始発の新幹線を使って受けた愛知県の企業の面接。言葉を投げつけてくる相手に、圧迫感しか感じなかった。

山田さんが参加した若者就業サポートステーションの「同窓会」。仲間と記念撮影もした＝県内で



山田隆志さん（仮名、二十代）は、家族の介護で三重に戻ることを前提に、大学四年の秋から就活を地元でやり直していた。結局、面接はうまくいかずに就職先は見つからないまま。卒業後も企業の規模や職種にこだわらずに就活を続けたが、「君イイね」と言われた企業も不採用。「何が正解か分からなくなった」

結果を出せず、次第に人の目が怖くなった。電車や市街地で人混みにいると吐き気や動悸（どうき）がするように。卒業から半年後、布団から出られなくなった。

自己表現が下手で、小さい頃からいじめやトラブルに巻き込まれてきた。大学でも自分が代表を務めるサークル活動の人間関係に悩まされ続けた。

現実を見たくなくてゲームにのめり込み、生活は昼夜逆転した。たまにコンビニに出掛けたら、店員とは目も合わせず、用が済んだら逃げ帰る日々。「親は愚痴も聞いてくれたし、待ってくれた。でも我慢の限界は来る。『いつまでそうしてる気や』と言われるときはつらかった」

家に引きこもる生活は一年半続いた。「今思えば、考えすぎていたと思う」と山田さんは振り返る。「あの頃は『どうせ失敗する』とか『社会に認めてもらえない』とか、否定的な言葉ばかりが頭の中で膨らんでいた」

生活が変わるきっかけは、ささいなことからだった。

実家にいるなら何かしなくてはと考え、夕食作りを引き受けた。冷蔵庫にある材料で簡単な料理を作る。共働きで疲れて帰宅する両親は「おいしい」「よくできている」と褒めてくれた。毎日の小さな“成功体験”から自信が付いてきた。

父親が定年退職し、「自立しなくては」との思いは強くなっていた。親が自分のために集めた資料にあった「若者就業サポートステーション」（サポステ）に相談をしようと決心。もともと電話は苦手なため、受話器を上げる動作から始め、番号の最後の数字を押すまで一カ月かかった。

電話や面談で相談を重ねるうちに「自分の気持ちを人に言ってもいいんだ。『助けて』と言えば、助けてもらえるんだと分かった」。サポステとつながることで社会との接点が出て、人を信用できるようになった。サポステの紹介で就いた企業で試用期間を終了し、昨年十一月から正社員にもなった。

つらい思いをしている人の参考になればと、山田さんはサポステが開く「同窓会」で、自身の引きこもり体験を語った。緊張はしたが、会場にいる人たちの顔をしっかりと見ながら、焦らず話した。

「できないと思う自分を認めてあげて」。山田さんは取材に対しても、改めてこう語った。「時間がかかってもいいから、できることを増やしていく。箸を並べることでも、何でもいから自分で考えて人の役に立つことを始めてみて」。それが社会への参加を求めて再び外へ出る第一歩になる、と。（中村優子）

<引きこもり> 厚生労働省の定義では「仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせず、6カ月以上続けて自宅に引きこもっている状態」。内閣府は昨年9月、引きこもりの15～39歳は全国で推計54万1000人との調査結果を公表した。

<若者就業サポートステーション> 就労に悩みを抱える15～39歳を対象に、キャリアコンサルタントなどによる相談、コミュニケーション訓練、協力企業への就労体験な

どの支援をしている。厚生労働省が委託した、若者支援のノウハウなどがあるNPO法人、株式会社などが運営している。県内は、四日市、津、伊勢、伊賀の四市に設置されており、利用無料。

<悲鳴上げるところ> (中) 統合失調症の息子、支える母 中日新聞 2017年2月18日
佐藤さんは「ボランティアで当事者の支援をしながら常に学んでいる」と語る＝県内で



「学校を休みたいんだ」。息子は高校二年の終わりがごろ、突然、告げてきた。「まさか。なんで?」。県内に住む佐藤清子さん＝仮名、七十代＝は三十年近く前に直面した困惑を今もありありと覚えている。

その少し前、持病のある息子のかかりつけ医から連絡があった。駆け付けた病院で「息子さんには妄想がある」と告げられた。統合失調症だった。

思い当たることもあった。息子は時々、「お母さん、今日も赤い服を着て学校来たよ」と口にしてはいたが、その時は気にもしていなかった。

学校に自転車で通う息子は成績も優秀で、「薬剤師になりたい」と将来の夢も語っていた。親として期待も大きかっただけに、「今、何が起きているのか」と現実を受け止められなかった。

医師の勧めもあり、一年間、休学させた。当時は障害に対する知識もなく、相談相手もいなかった。息子は妄想から夜昼なくはだしで家を飛び出し、佐藤さんが追い掛ける日々が続いた。

半年ほどの入院の後、復学できるまでに回復。卒業式を迎え、専門学校に進学。大手企業に就職も果たした。安心したのもつかの間、小さなミスをきっかけに、息子は入社して半年で辞表を出し、そのまま行方不明になった。四日後に見つかったものの、その後、二十年以上にわたって入退院を繰り返すことに。グループホームに入所し、小規模作業所に通う一方で、何度も自殺未遂を起こした。

「寝ている姿を見ながら何度、『この子を殺して自分も死のう』と思ったか…。佐藤さんは、親が精神障害がある子に手をかけてしまう事件は「人ごとではなく、何かのきっかけに起こりうる紙一重の状態」と言う。

ストレスから佐藤さんは体調を崩し、二度入院した。手術も受け、今も低血糖症や腸閉塞（ちょうへいそく）を患う。しかし、息子の行く末をできる限り見届けるために「元気でおらなあかん」と自分を奮い立たせる。

二十年ほど前から、息子の主治医を通じて知った作業所に顔を出すようになった。十年前からは作業所とは違う場所で、精神障害者と一緒に料理を作りながら、相手の話に耳を傾けるボランティアとして活動するようになった。「だれかが続けないと、当事者の居場所がなくなりますから」

精神を病んだ人たちが何に苦しみ、何に不安がっているのか。どう向き合えば、こちらの気持ちを伝えられるのか。「活動を通して、日々学ばせてもらっている」。ボランティア仲間に話を聞いてもらい、支えてもらったことで「随分楽になった」とも話す。

そんな佐藤さんだから、行政に訴えたいことがある。「当事者の居場所をつくり、支援することは最優先事項だが、同時に家族の居場所もほしい」。四六時中一緒に生活する家族には行き場がない。気持ちも体も疲れ切ってしまう前に「ほっとできる場所、ごろんと休息できる場所があれば、また当事者と接することができるんです」

<悲鳴上げるところ> (下) 安心して 共に生きよう 中日新聞 2017年2月25日

心を病み、苦しんでいる人たちを、周囲はどう受け止め、どう接すればいいのか。当事者やその家族らを支援する専門家にアドバイスを聞いた。

鈴鹿市神戸に借りた一軒家で、パソコン教室や、会食の場を設け、引きこもりの当事者の居場所と、その家族同士の交流の場をつくっているのが「みえオレンジの会」だ。定期的に四日市市や津市で学習会も開く。

堀部尚之代表（65）は「引きこもることは決して悪いことではない。むしろ休むことは大事だ」と断言する。ただし、本人がどうしていいか分からない状況に陥っているため、「家族はまず、本人が孤立感や劣等感に悩んでいることに気付いてほしい。相手が話すようになったら聞くことに徹すること」と助言する。また、家族ごと孤立しないように「専門家や、同じ境遇の家族会などから情報を得てつながって」と話す。

NPO法人の県精神保健福祉会（津市）は、精神障害の当事者の住宅保証人を引き受けたり、県こころの健康センター（同市）で家族の相談を受けたりしている。

精神障害者の居場所でもある作業所で段ボールの組み立てをする＝県内で

「精神障害者は『怖い』という偏見や差別が根強くある」と山本武之理事長（73）。そのため、当事者やその家族はおかしいと気付いても受診や支援団体への相談を遅らせたり、世間の目から隠そうとしたりして、結局、理解が広がらない悪循環が生まれていると指摘する。

「精神障害者は、心優しく、自分を出せない性格の人が多い。普通に接してくれれば、それだけで当事者も家族も孤立せずに安心して暮らせる」と訴える。

精神科医で県立小児診療センターあすなろ学園（津市）の金井剛園長（60）は、当事者が自立を目指すなら、助けを求める練習や、失敗してもそれを誰かに言える関係性を築くことも必要だという。「何もかも自分で背負えるわけではない。うまく人に頼ることができなければ、自立は難しい」と論ずる。

精神障害は、環境やきっかけ次第で誰もが発症する可能性があり、決して人ごとではない。医療機関や行政、市民団体、当事者の家族がチームを組んで支援体制を考え、「居るだけでいい場所から、悩みを聞いてくれる施設、就業に向けての訓練所まで段階に応じた居場所の設置が各地域に進むといい」と金井園長。「それがともに安心して暮らせる地域社会だ」（この連載は、中村優子が担当しました）



◆取材後記

精神障害者の支援グループの取材で、30代の主婦が「社会とつながれたらいいな」とつぶやいていた。当事者が「自分たちは他の人と違う」と孤独を感じながら生活しなければいけない社会は、どこかおかしい。

高校教諭の私は、昨年4月から1年間、中日新聞社で研修生として記者生活を送っている。学校を離れ、普段の生活では出会えない人たちからさまざまな話を聞くことに努めてきた。この3回の連載の背後には、登場しない多くの人の思いが詰まっている。それを代弁して伝えるなら「願いはたった一つ、『共に生きたい』」だ。

どんな人も、人と隔てられることなく生活できることが当然な社会であってほしい。互いに思いやって、そんな社会を築きたい。教育の基礎となる部分を、改めて取材の現場から教わった。

初の主役は「ごほうびみたいな11日間」 映画「真白の恋」の女優、佐藤みゆきに聞く
産経新聞 2017年2月25日

映画で初めての主役は、恋をする軽度の知的障害者。難しい設定だった。

「いまも手元にある台本を見返すと、どういう気持ちで、どういうことをやりたいかを、たくさんの付箋（ふせん）に書き込んでいます。とにかく不安だったんでしょね」

25日から東京・渋谷の映画館アップリンクで公開される「真白（ましろ）の恋」（坂本欣弘監督）で、主役の渋谷真白を演じる女優の佐藤みゆき（32）が撮影の日々を振り返る。

■徐々に変化する感情

舞台は富山県射水市の新湊。立山連峰を望む美しい港町に家族と暮らす真白は、軽度の知的障害があるが、身の回りのことは自分でできるし、日常生活に支障はない。父親（長谷川初範）が営む自転車店を手伝いながら、隣に住むいとこの雪菜（岩井堂聖子）と楽しい毎日を過ごしていた。



ある日、兄の結婚式で出かけた神社で、東京から来ていたカメラマンの油井（福地祐介）と出会う。写真を教えてもらううち、真白の心に不思議な気持ちが広がる…。

撮影前に障害者の施設を訪れるなどして役作りに努めたが、「障害は個性だから性格と一緒」という職員の言葉が心に残った。

「素直でチャーミングなところのある一人の人として、素直に演じればよいんだと納得しました」

撮影の撮り順が決まっておらず、翌日のスケジュールが決まるのが深夜になることもあり、なかなか大変だった。

真白はデートも初めてで、すべての行動がなるべく新鮮に思えるように心がけたという。「好きになる感情は、ここから“赤”、じゃなくて、白から次第に桃色になってから赤に、みたいな感じで、徐々に好きになっていく感じにしたいと思いました」

油井と自転車の2人乗りをする場面があるが、一度体勢を崩して油井の体をつかみ直す微妙な距離感の測り方が真白らしいと感じた。

「十何回、試写で見て、それでも客観的に見られるようになったのはようやく最近になってから。最初のころは自分の芝居のアラばかりが気になって…」と笑う。

■栄養士との両立でダウン

芝居との出会いは高校時代。地元・福島県の高校に進学後、勧誘されて演劇部に入った。初めての発表会。同世代の他校の演劇部員が、自分たちの芝居を見て泣いているのを目の当たりにした。

「多感な時期の人たちが泣くなんて、ほかでは得られない“称賛”じゃないですか。他人の心を動かす体験をして、これはすごいことだと気づいた。それが原体験かもしれません」

そんなある日、東京に住むおばが会わせてくれた、ある劇団に所属する女優から、劇団トップでも生活のためにアルバイトをしていると聞かされる。

今にして思えば、芝居熱を冷まそうという親の差し金だったのかもしれない。が、ともかく生活ができないのはダメだ、やっぱり手に職をつけなくては。そう思い立ち、会津大学短期大学部の食物栄養学科に進学し、栄養士を目指す。

が、いよいよ人生を左右する出会いが待っていた。大学の先輩に現在、演出家として活躍する成島秀和がいたのだ。

「こんなにおもしろいことをしている人がいる」

刺激を受け、結局、卒業後は成島とともに上京し、劇団「こゆび侍」を旗揚げする。

同時に東京都の学校給食の栄養士になり、平日は早朝から働き、土日は芝居に精を出していたら、半年で肺結核になってしまった。栄養士の仕事は3年で辞め、その後は舞台を中心に女優として活動している。

■この人のために、この映画のために

そんな中で巡り合ったのが「真白の恋」だった。

坂本監督は、故郷の富山で映像制作の仕事をしながらか映画監督の夢を追い続けた。今回

が初の長編監督作になる。脚本の北川亜矢子は、自身の弟が軽度の知的障害者で、この作品にかける思いは強い。

一昨年の2月に新湊で行われた撮影は11日間と短かったが、そんなみんなの気持ちがぎゅっと詰まっていて、「30年間生きてきた中で、ごほうびみたいな11日間だった」と振り返る。

「坂本監督は東京で助監督をやっていたのを地元の富山に帰って会社をつくり、ためたお金を全部使ってこの映画を撮るといふ意気込みがあった。北川さんにとっても生涯の1本だと思う。この人のために、この映画のために、という思いを全員が共有していた。私も使命感みたいなものがあって、その夢中な感じも手伝って共演者のみなさんが温かく支えてくださったのだと思っています」

映画は高校の演劇部で体験した観客の直接的な反応は感じにくいですが、試写会などで見終わった人から握手を求められることもある。

「そういうときは、やっていてよかったな、これからも真摯（しんし）に頑張っていかなくちゃ、と思いますね」と気を引き締める。

「美しい景色と自然の光が閉じ込められていて、観客が登場人物と一緒に体感している気分になれるのが映画の魅力でしょうか。この映画のように良い作品にどっぷり浸れる時間が、この後の人生で何度もあるといいな。何者にでもなれる役者でありたいので、そういう機会が増えれば」（文化部 藤井克郎）

「真白の恋」すでに富山県内ではTOHOシネマズファボーレ富山とTOHOシネマズ高岡で先行公開されているほか、18日から愛媛・イオンシネマ今治新都市で公開中。東京では25日から渋谷のアップリンクで上映。

ギャンブル依存苦しみ理解を 全国に536万人



勝負が決まるたびに歓声と怒号が飛び交うマカオのカジノ

カジノを中心とした統合型リゾート施設（IR）整備

推進法が昨年12月に施行され、自治体などで誘致を目指す動きがある。カードやルーレット、スロットといったギャンブルを集めたカジノ（賭博場）が国内でも出現しそうだ。一方で、ギャンブル依存症に悩み、苦しむ人が少なくない現状もある。厚生労働省の推計（2014年）ではギャンブル依存症が疑われる人は全国で536万人に達する。ギャンブル依存症は「病気」で、治療など正しい対応が不可欠だ。

警察庁のまとめでは、昨年1年間に全国で摘発された刑法犯のうち、動機・原因が、パチンコなど賭博性の高い遊技機依存だったものが1329件、公営の競馬や競輪などのギャンブル依存は999件。それぞれ前年比34%増、41%増と大きく伸びた。刑法犯全体が減っているのに対し、この種の依存症関係の事案は逆に増えているという。

札幌市に住む男性（55）は、30歳前後のころからパチンコとパチスロを始めた。嫌

「病気」適切な治療不可欠

北海道新聞 2017年2月24日

OSMI5という米国の診断基準から適立精神保健福祉センターが作成

ギャンブル依存症の診断基準

- 興奮を得るために掛け金を増額したギャンブルが必要になる
- ギャンブルをやらないと落ち着かなくなったり、イライラしたりする
- ギャンブルを減らそう、やめようと努力を繰り返したがうまくいかない
- ギャンブルにとらわれている（いつもギャンブルのことを考えている）
- 無気力、不安なときギャンブルをすることがよくある
- ギャンブルの負けを別の日に取り返そうとすることがよくある
- ギャンブルにどのくらい熱中しているか聞そうとうそをつく
- ギャンブルで重要な人間関係、仕事などが危機状況になったことがある
- ギャンブルが原因の絶望的な経済状況を助ける金を他人に頼る

チェック項目が
4~5個が軽度 6~7個が中度 8~9個が重度

なことがあると足が向かい、トラブルで会社を辞めた。失業手当や亡父が残した100万円もパチンコにつき込み、一時はもうけで生活をつないだが、もちろん長くは続かなかった。

「2万円の勝ち負けから始まった。負けを取り戻そうとして勝ち負けを繰り返すうちに、10万円を超えるほど金銭感覚の限界が大きくなっていった」。交通費の千円すら財布に残らないほど、のめり込んだ。

男性は、依存症の人たちが共同生活して社会復帰を目指す施設を紹介されて入居。お金を管理される暮らしを経て、自由参加の共同体である自助グループGA（ギャンブラーズ・アノニマス）にも参加した。同じ悩みを持つ仲間と体験を語り合うことで気持ちが楽になり、今はパチンコなどを断っている。

「ギャンブル依存症は病気。性格の問題ではなく、脳にギャンブルが必要という情報が書き込まれ、消えなくなる」。依存症治療を行う旭山病院（札幌）の橋本省吾医師は指摘する。

依存のメカニズムについても、スロットマシンでの実験を挙げ、注意を呼び掛ける。数字が三つそろそろ当たりで脳に反応が出たが、二つそろそろ「ニアミス（惜しくも外れの状態）」でも脳が反応し、続けたい欲求が高まったという。「ギャンブルは当たっても外れても、はまっていく恐怖のシステム」と強調する。

ギャンブル依存症の人の相談を受け付けている道立精神保健福祉センター。田辺等所長によると「1日に5万円以上使ってしまうようなヘビーユーザーの相談が増えている印象」という。その上で「依存症では犯罪や自殺をするまでギャンブルをやり続けてしまう」と警鐘を鳴らす。

自分がギャンブル依存症のおそれがないか気になる人には、確認できる診断基準がある。田辺所長は「4～6個ならボーダーライン。なんであれギャンブルをやめる対応が必要。7～9個だと依存症として治療をしないといけない」と話す。

同センターにはいったんギャンブルを断ったものの、2度、3度と同じように相談に訪れる人が多いという。依存の状態が落ち着いたからといって、少しならと再開すると、依存症に引き戻されてしまう。田辺所長は「依存症は一人で断ち切るのは困難。心理療法や、GAのグループ療法で対応を」としている。（桜井則彦）

依存症の当事者、家族 相談窓口

■道立精神保健福祉センター（電）011・864・7000 依存症当事者グループの交流会が月2回あり、個別相談後に参加できる。また道内各保健所でも相談できる。

■札幌こころのセンター（札幌市精神保健福祉センター）（電）011・622・0556

■自助グループ GAは道内各地でミーティングを開催。依存症本人の家族や知人が悩みを分かち合うギャマノンもミーティングを行っている。GA、ギャマノンともに匿名で、言いつ放し、聞きっぱなしがルール。ホームページなどで日程など確認を。

特別支援学校教員 負担減へ 代替講師配備、島根県教委

山陰中央新報 2017年2月25日

島根県教育委員会は2017年度、発達障害のある児童生徒などの指導を担当する現場教員の支援体制を強化する。特別支援学校の教員が公立小中学校に出向き、相談業務に対応できるよう代替の非常勤講師を置くほか、学級担任に指導法を助言する専任教員を教育事務所に配置。支援の質を向上しながら、現場教員の負担を軽減する。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行